

生徒を学びの「主役」にするため すべての高校で、今こそ「探究モード」へ

総合的な学習の時間の研究者であり、その指導法に関する著書もある野口教授に、座談会でファシリテーターを務めるなかで見えてきた、探究の実践ポイントについてご寄稿いただきました。



山形大学 学術研究院
野口 徹 教授

のぐち・とおる ● 東京都立小学校勤務を経て、2011年に山形大学に着任。生活科・総合的な学習の時間を中心に研究を進めている。日本生活科・総合的な学習教育学会 常任理事。文部科学省小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編作成協力者、国立教育政策研究所学習指導要領実施状況調査結果分析委員会委員(中学校・高校 総合的な学習の時間)、山形県 探究型学習推進プロジェクト事業研究協力者などを歴任している。近著に、『総合的な学習の時間の指導法—教職課程コアカリキュラム対応 大学用テキスト 理論と実践の融合』(日本文教出版)がある。

幼児期から高校まで。すべての場所で「探究」は求められている

高校への期待が大きい 探究の実践

いきなりではありませんが、次にいくつかの数字を示します。これらは何を意味しているもの、とお考えになられるでしょうか。

幼稚園	3
保育所	4
こども園	4
小学校	20
中学校	42
高校	186

これらの数字だけを示されても、読者の方はちょっと想像しがたいかも知れません。では、これに次のような注

釈を付けるといかがでしょうか。

「新学習指導要領等の本文中において、『探究』という語句が使用された数(教科等・科目名を除く)」

これだと印象が変化したかも知れません。昨年と今年で改訂・告示された新しい学習指導要領等から、その本文中に用いられている「探究」という語句を

私が二つ二つ数えることを試みた結果の数だったのです。ご案内のように、今回の高校の学習指導要領では、教科等や科目名に「古典探究」「理数探究」など「探究」を冠したものが示されています。これらについてはカウントしておりません。つまり、先ほど示した数字は、生徒が「探究する」などの意味で

使用されているものの一覧である、と言えます。この数字を見ると、高校の数の圧倒的な多さが目につきます。今回

の高校の学習指導要領では、「探究」の意義や位置付けがかなり深いものとされていることが伝わってきます。

この夏に公表された学習指導要領の各教科等の解説を見ると、「○○を探究する」などのように、探究の概念を読者が自明のものとしていることを前提として使用されているのがわかります。まるで「掌中の珠」であるかのように何度も現れてくる「探究」ですが、我々はこのような意味で理解しておけばよいのでしょうか。各教科の学習指導要領解説を見ると、いくつかのその説明らしきも

のを見つけ出すことができます。

例えば、地理歴史の解説には、

「生徒が生活圏に見られる課題を自ら設定し、情報の収集、整理・分析を行って、立てられた仮説を検証してまとめる一連の活動の中で、新たな発見や理解の深化を見だし、改めて仮説や場合によっては課題を設定し直し、情報の収集、整理・分析を行っていくというスパイラルする学習の姿を想定している」

というものがあります。同様に理科の解説では、

「自然の事物・現象の中に課題を設定し、情報を収集し、得られた情報を適切に処理して規則性を見いだした



り、認識を深めたりするなど、自然を探究する過程を踏まえることが大切」と説明しています。

これらの説明には「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ」という過程が存在していることが見えてくることと思います。いわゆる「探究の過程」です。つまり、探究とは、生徒自らが上記の過程による学習を「主体」となって進めるスタイルを示しているようです。

さらに家庭の解説の

「正解が一つに絞れない課題を考える際、最適な解決方法を探究したりする活動」

という表記からも、生徒が探究するべき課題は、正解が絞れない中で最適解を探っていくこととする「質」を求めているのがわかります。

こういった高校の探究の特質を最もわかりやすく示している内容を総合的な探究の時間の解説に見つけることができます。この解説では、

「高等学校においてこのような生徒の姿を実現していくに当たっては、生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものであること」

が求められる、と示しており、この「質の高い探究」として、

【探究の過程の高度化】

・探究において目的と解決の方法に矛盾がない(整合性)

・探究において適切に資質・能力を活用している(効果性)

・焦点化し深く掘り下げて探究している(鋭角性)

・幅広い可能性を視野に入れながら探究している(広角性)

【探究が自律的】

・自分にとって関わりが深い課題になる(自己課題)

・探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる(運用)

・得られた知見を生かして社会に参画しようとする(社会参画)

などの生徒が探究として学ぶ姿を挙げているのです。つまり、高校で展開されるべき探究は、極めて高度な学習内容を生徒自身が「主役」となって力強く進めていくことを指し示していることがわかるのです。

実は多くの先生が既に

「探究の支援」を行っている

今回実施した座談会では、3人の先生方がそれぞれ生徒を「主役」とする探究にどのような必要性を感じ、いかに取り組んでいるか、そして、探究が基となって学校の枠を超えて自律的に動き出す生徒の様子も語られました。こうした探究の実践は、「一部の先生にし

かできないこと」でしょうか。いえ、決してそのようなことはありません。

全国の先生方は、探究に臆するべきではないように思います。なぜならば、先生方は、このような生徒の姿を長年にわたって支えてきた蓄積があるからです。それは、「部活動」等、生徒が自主的に活動する場面です。

例えば、部活動では、生徒が自ら取り組むべき課題を見つけ、解決するのに必要だと思われる情報を集めてきて、使えそうな情報とそうでないものを分析し、その成果を試合や発表会という形式で試し、まとめてきたはずです。また、それを生徒が自主的にやり遂げる能力を生徒に養ってきたのがこれまでの先生方だったではありませんか。素晴らしい蓄積です。

ただ、そこで振るわれてきた手腕は、それぞれの部活動の固有なものとして学校内で共有するまでには至っていないか。それではないでしょうか。今後は、それを普段行われる幾多の授業の中で汎用的に機能するものとしていけるか。そういった学校の組織的な取り組みが探究の成否を分けるものとなりそうです。これまで各学校に蓄積されてきた生徒の探究を支援する「手腕」を積極的に交流していくことが必須となっていくことでしょうか。

どの学校でも
前向きに取り組む

また、座談会では、生徒が「やらされている」のではなく「自分で選んでやっている」という感覚をもつて学ぶことの重要性も話題になりました。中学生が高校生になるにあたって、最初に直面する「選択」は高校選びです。そこで中学生の生徒自らがしっかり選んで入学することが、その後の学びの姿勢に影響すると考えられます。これからの高校には、こういった中学生の「求め」に対応すべく、どのような探究を推進してどのような生徒を育てているのか、ということを反映して学校の教育目標として整備し、それらを「Admissionポリシー」・学校の個性」としてわかりやすく説明していくことが層求められる、と言えるのではないのでしょうか。

こう考えますと、探究は、これまでも積極的に取り組んできたSSHやSGH、さらに「課題研究」で成果を積み上げてきた専門高校等が今後最も占有するものではなく、すべての高校において本質的に重要な取り組みなのであり、どの学校も生徒と教師が協働して、まずは1歩ずつ踏み出していくことが極めて大事なのだ、ということはいくらでも明らかでしょう。